様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２９８

研究課題名（和文）『ニュー・リパブリック』誌を中心とした１９２０－３０年代アメリカの知的趨勢

研究課題名（英文）The New Republic and and Intellectual crosscurrents of the 1920s and 1930s

研究代表者
吉田　朋正（Yoshida, Tomonao）

首都大学東京・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：４０３０５４０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1920年代録として名高いExile's Returnの著者、批評家マルカム・カウリーの1920-30年代の活動に着目しながら、この歴史的転換期の知的趨勢を読み解こうとするものである。とりわけ1930年代前半、『ニュー・リパブリック』誌でカウリーの同僚であった同時代を代表するもう一人の批評家、エドマンド・ウィルソンと、カウリーの幼なじみであり、後年アメリカの生んだもっともユニークな思想家の一人と目されるに至ったケネス・バークとの関係が本研究の焦点となった。研究の派生的成果としてExile's Returnの続編であるカウリーの1930年代録を抄訳、こちらは全訳版を現在準備中である。

研究成果の概要（英文）：Placing particular emphasis on Malcolm Cowley's early career in the 1920s and 30s, this study provided a compact survey of some intellectual lives of the "lost generation" American writers in the decades of great transition. My attention was especially focused to his relationship with Edmund Wilson, Cowley's elder colleague at the New Republic magazine in the early 1930s, and Kenneth Burke, a childhood friend of Cowley's and one of the most unique American "self-made" men of philosophical ideas. Among a few ramifications of the research was Japanese translation of selected chapters of Cowley's autobiographical chronicle of the "dirty thirties," The Dream of the Golden Mountains (1989). Translation of the whole book is now in progress.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学　ロスト・ジェネレーション　モダニズム

１．研究開始当初の背景

本研究の出発点は、研究代表者の吉田が翻訳に携わった Malcolm Cowley の 1920 年代録, *Exile's Return: A Literary Odyssey of the 1920s*（マルカム・カウリー『ロスト・ジェネレーション――異郷からの帰還』みすず書房刊、以下『ロスト』と略）にある。この本はいわゆる「狂騒の 1920 年代」を活写したクロニクルとして広く知られているが、文化爛熟期のアメリカやヨーロッパを鮮やかに描き出したものであると同時に、それが執筆された 1930 年代当時の暗い時代背景をも映し出しており、その意味では明暗相異なる二つの「10 年」を幽冥の境のように〈繋ぐ〉テクストだと言っても良い。

本書のこのような複雑な立ち位置は、おのずと翻訳者に詳細な書誌的調査を促すことになった。ほどなく、本書の元は第一次大戦勃発時に創刊された雑誌 *The New Republic* の不定期連載記事であったこと（カウリーは、同時代を代表するもう一人の批評家エドマンド・ウィルソンと共に、同誌の読書欄の編集責任者、兼記者であった）、また本書と並んでモダニズム期アメリカの代表的な批評作品と目されている *Axel's Castle: A Study in Imaginative Literature of 1870-1930*――カウリーの *Exile's Return* に数年先んじて出たウィルソンの処女作であり、カウリーも同書で大きく取り上げている――もまた、同誌に分載された記事が元となっていること、さらにまた、この『アクセルの城』関連の記事をはじめとするウィルソンの初期エッセイの多くを編集者として手がけていたのが他でもない同僚マルカム・カウリーであり、二人のあいだにはかなり深い個人的な関係、ないし因縁があることもまた次第に明らかになっていった。

２．研究の目的

以上のような伝記的細部の調査を入り口としつつ、本研究はカウリーやウィルソンに代表される「失われた世代」の作家や芸術家たちの、より大きな知的動向を捉えることを目的として着手された。

もっとも重要な具体的目標の一つは、一般に 1920 年代を描いた重要な古典と見なされながらも、どちらかといえば「アメリカのモダニズム文学」を記録したものとしてやや狭量な文学史的文脈で参照されることの多かった *Exile's Return* を、より大きな文化史的フレームワークの中で新たに提示し、この作業を通じて「モダン」や「モダニズム」と呼称される現象に新たな光を当てることであった。

大恐慌のさなか、まだ 1920 年代の「夢」の記憶が定かな 30 年代の刹那に慌ただしく書かれたこのクロニクルには、当時のアメリカ人作家・芸術家たちの姿のみならず、ミュルジュールたちの「ボエーム」や、ドレスデンにツルゲーネフを訪ねる国外逃亡中のドストエフスキー、感嘆と共にパリ・コミューン を眺めるカール・マルクス等々、歴史的にも地理的に驚くほど多様な事象が書き留められている。それは、ごく近い過去の出来事を他の歴史的事象を通じてなんとか意義づけようとする、どこか可能性に留まったままの試みであったと言っても良い。この研究では、特にそうした「アメリカ文学史」の枠に収まりきらない本書の広い含意を読み取り、強調すると共に、これをより現代的な展望の中で定位させることを目指した。

もうひとつの大きな具体的目標は、本邦ではあまり知られていない *Exile's Return* の「続編」とも言うべきカウリーの 1930 年代録, *The Dream of the Golden Mountains: Remembering the 1930s*（1979）を紹介・翻訳することである。

本書の物語はちょうど前著の「終わり」にあたるニューヨーク株価大暴落を起点としたもので、この歴史的出来事の数週間前からカウリーが働き始めた雑誌『ニュー・リパブリック』の編集部が主要な舞台の一つとなっている。この雑誌はカウリーの他にも、先述のウィルソンや文明批評家のルイス・マンフォード、「ニューディール」原案者の一人である経済学者のジョージ・スーレイらを編集者・兼記者として抱え、さらに常連投稿者としてジョン・デューイからケネス・バークにいたる幅広い年代・分野の著者を擁した、まさに混乱の 1930 年代を代表すると言うべき先駆的オピニオン誌であった。このような雑誌周辺の作家や知識人の動向を記したカウリーの本は、当時の知的趨勢をたどるこの研究にとって非常に重要な地図を提供してくれるリソースであり、とりわけ 1920 年代録として広く知られる *Exile's Return* と組み合わさることで、1920-30 年代の大転換期を一望する、かなりユニークな歴史的パノラマを読者に提供してくれる。

しかしある時代の歴史を伝える、それ自体すでに歴史的なテクストの声を現代に鮮やかに再生するには、やはりどうしても膨大な細部を宿した書物そのものの現し身が必要になってくる。そこで本研究では、研究と同時進行で本書の翻訳を準備し、先に出版済みの『ロスト』とあわせ、カウリーによる「危機の二〇年」（E・H・カー）のパノラマを日本語で再構築することを副次的な目標とした。先の 1920 年代録の翻訳では、書誌情報以外の資料としては索引を兼ねた人物辞典を付したのみであったが、政治・経済的な事象をより広範囲に含んだ *The Dream of the Golden Mountains* の翻訳ではこれをいっそ

う拡充し、前訳書では読みやすさを優先してかなり省いてしまった本文への歴史的注釈も、なるべく豊富に加えることにした。

３．研究の方法

以上の目的においてすでに示唆されているとおり、本研究は実証的なテクストの精査に基づきながら、そこに描かれた事象の置かれるべき、より大きな文脈やフレームワークを改めて考察し、可能な範囲でこれを再構築することを基本的な方法としている。

このような手法に基づく研究として当然のことながら、本研究では書籍として入手可能な主要テクストのほか、1920-30 年代当時の雑誌（特に当時の *The New Republic* 誌）や各種リトルマガジン、出版済みの書簡集などに加え、NYPL 内 Berg Collection 所蔵の手紙・メモに代表されるような、複数の一次資料を広く調査対象とすることになった。（なおこうした資料の構築は長期的・継続的に為されるべきものであり、特に電子化を経た一部の有効性の高い古い資料などは、本研究期間に留まらず、次期以降に計画されているより発展的なプロジェクトでも継続して利用される予定である。）

こうした実証的検証の具体例のひとつは、雑誌等での初出掲載時におけるテクストと、「書籍」として出版された際のテクストの異同の精査である。この調査はとりわけ、エドマンド・ウィルソンが 1930 年代に *The New Republic* 誌上に掲載したジャーナリスティックな記事の数々と、後年出版されたエッセイ集との比較において大きな意味を持つことになった。ウィルソンのテクストはしばしば雑誌版と書籍版でかなり大きな異同が認められ、特に *The New Republic* 誌上でケネス・バークやジョージ・スーレイを巻き込む大論争を引き起こすことになった“An Appeal to Progressives” というエッセイなどは、*The Shores of Light* 所載の改訂版では、ほとんど何が論争の原因か分からないほど有意に書き換えられてしまっている。1930 年代初頭、ウィルソンは雑誌中もっとも熱心なコミュニズムのシンパの一人であり、元々の「アピール」は雑誌の創刊者であるハーバート・クローリーの唱えた「アメリカ的リベラリズム」の有効性に疑問を呈しつつ、いっそうラディカルな社会改革の道を求めるものであった（書籍版はより穏当な主張とスタイルに改められており、同様の変更は *The American Earthquake* などではとりわけ顕著に認められる）。

多くの場合、こうした「書き換え」はコミュニズムに対する態度変更に基づくわけだが、ウィルソンの場合この種の過去抹消はかなり徹底して為されており、このような観点で見ると、1940 年の *To the Finland Station* 『フィンランド駅へ』が彼にとって重要な転換点であったことも見えてくる。つまりこの本以降、ウィルソンにとって「コミュニズム」は現実の政治的実践であることを完全に止め、ヴィーコからレーニンへと至る「思想史」的な大テーマへと成り変わるのであり、後のアメリカを代表する a man of letters としてのキャリアの起点もこの辺りにあったと見ることができる。他方で同じころ、当時コミュニズムについてはどちらかと言えばより穏健な「フェロー・トラベラー」の一人に過ぎなかったマルカム・カウリーが、同誌を代表して「モスクワ裁判」を支持してしまったことで、アメリカの言論界からしばらく黙殺されることになってしまうのとは対照的である、といった構図も見えてくるだろう。

以上のような観察こそは、先述した、テクストの「実証的検証」からより大きな「文脈ないしフレームワーク」を捉えようとする、本研究の基本的方法とその成果の一例であると言えるだろう。

４．研究成果

主成果の一つであるシンポジウム発表（モダンの縒り糸：Malcolm Cowley, Edmund Wilson, Kenneth Burke の「危機の 20 年」, 於日本英文学会関東支部第 10 回大会〔2014 年度秋季大会〕シンポジウム「モダニズム文学と知識人サークル」）では、雑誌 *The New Republic* を共にキャリアの始点としながらも、やがて 1930 年代後半以降に方向性を大きく違えて行くエドマンド・ウィルソンとマルカム・カウリーの二人に光をあて、それぞれの事実上の処女作である『アクセルの城』と『ロスト』の間にある密かな関係性を明らかにした。

二冊はいずれも 1930 年代アメリカを代表する批評書であるが、項目 1 でも示したように、雑誌社の同じ部局で働く二人の編集者がほぼ同じ時期に書いたこれらの本は、実はかなり密接な関係を持っている。カウリーはウィルソンの原稿を誰にも先んじて熱心に読み込んだ「最初の読者」であり、結果、続いて出版されたカウリーの 20 年代録は、ウィルソンが『アクセルの城』で展開した象徴主義・モダニズム論への批判的注釈という性質を帯びることになった。これら二冊は「モダニズム」の概念をいわば相互補完的に形成しており、ここらからまた、これまで別々に読まれてきた両者をむしろ対を成すようなテクストとして読み解く新たなコンテクストが生じてくる。

また本発表では、特に後者のカウリーの本が前半で印象的に描き出している、当時 “Valutaschweine” とドイツ語で卑称されたデラシネ的旅行者の存在に着目している。彼らは金本位制下で生じる激しい為替変動に

寄生してヨーロッパ中を渡り歩いていた旅行者たちであり、カウリーは貧しいアメリカ人流浪者である自分たちもまた「その列に加わるほかなかった」と語っている。彼がこの〈豚/寄生虫（シュヴァイン）〉の群れに見出したのは、ウィルソンの審美的モダニズム観では捉えきれなかった、モダニズムの芸術至上主義的態度と、当時の政治・経済的状況のあいだにあったパラドキシカルな関係性である。端的に言えば、それはアメリカの資本主義や拝金的態度に「反発」して “exiles” となった当時の「失われた世代」が、実のところ当のアメリカン・キャピタルによって引き起こされた、ヨーロッパの特殊な経済的状況に誰よりも深く、絶対的に依存していたという事実の指摘にほかならない。

これは次にように言い換えても良いだろう。例えばダダイストたちの標榜する「芸術」は理念的には資本主義や物質文明に対する抵抗でありうる――だが現実には、何よりも戦後の欧州を席巻した容赦のない社会的勢力、とりわけアングロ・サクソン国家から到来した新しい産業資本や金融資本こそが「貧しい芸術家」の寄生する大いなる力だったのであり、また彼らの「芸術革命」の標語を鮮やかたらしめている当のものであったのだ、と。現代芸術が孕むこうした矛盾が、一気に噴出してくるプロセスこそがカウリーが真っ先に見出したものだったのであり、この矛盾のアメリカ的帰結が〈亡命者の帰還〉と呼ばれる弁証、つまりは芸術的前衛性からの後退に他ならなかった。こうした視点には、アヴァンギャルド運動をどちらかといえば自国内の芸術的抵抗として捉えがちな欧州の芸術家や文学者に対して、カウリーのような「パリのアメリカ人」が早くから優位に発揮し得たトランスアトランティックな批評眼があった、と言うこともできるだろう。

最後に項目 2 で目標の一つとしてあげた *The Dream of the Golden Mountain* 翻訳については、研究期間終了時の現在、序章と最初の 3 章分を詳注とともに雑誌翻訳として掲載している。全体の出版には至っていないが、本文の翻訳はすでに完成しており、索引事典や本文への注釈が完成し次第、すみやかに完本としてこれを公表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

<u>吉田朋正</u>（翻訳），クリストファー・マギン「奪いし王国, 奪われし王国」,『思想』1063 号 / 2012 年 11 月号（岩波書店），査読無, 2012 年 11 月, pp. 68-93.

<u>吉田朋正</u>（翻訳），マルカム・カウリー「ゴールデン・マウンテンの夢――回想の 1930 年代」,『Metropolitan』 第 II 期第 1 号（通巻 57 号, メトロポリタン編集局），査読無, pp. 30-59, 2015 年 1 月.

〔学会発表〕（計１件）

モダンの縒り糸――Malcolm Cowley, Edmund Wilson, Kenneth Burke の「危機の 20 年」, 於日本英文学会関東支部第 10 回大会（2014 年度秋季大会）シンポジウム「モダニズム文学と知識人サークル」司会：辻秀雄；講師：越智博美, 大田信良, <u>吉田朋正</u>. 2014 年 10 月 26 日, 上智大学四谷キャンパス（東京都千代田区紀尾井町 7-1）

〔図書〕（計１件）
<u>吉田朋正</u>（翻訳），エリザベス・シューエル「法廷と夢」,『ユリイカ：詩と批評』 2015 年 3 月臨時増刊号〔総特集 150 年目の『不思議の国のアリス』〕（青土社），2015 年 2 月, 253-67/421.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　朋正　（YOSHIDA, Tomonao）
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号：40305404

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし